

# 就学移行期の子どもの 発達を支えるもの

— アンカーポイントの視点と子どものQOLの発達に着目して —

細川美幸・眞榮城和美<sup>1</sup>・梅崎高行<sup>2</sup>・酒井 厚<sup>3</sup>

The Factor of Children's Development during Their Transition  
to Primary School: The Perspective of Anchor Points and  
the Development of Children's Quality of Life

Miyuki Hosokawa, Kazumi Maeshiro,  
Takayuki Umezaki, Atsushi Sakai

## 1. 目的

これまでの就学移行に関する研究は、就学前施設、就学後の学校で何ができるか、また、障害を持った子どもたちに関する就学移行支援の研究が多い（山中, 2010；宮本・白川・濱中・前川・北垣・清水 山田, 2020 など）。例えば、保育者に焦点を当てた研究や（堀江・玉井, 2012；佐藤, 2013 など）、小学校教諭と保育者の連携や意図・背景の違いについての研究がある（若林・上田・越中・岡花・中西・濱田・廣瀬・松井・八島・山崎, 2018）。さらに、障害を持った子どもたちとその親に関する研究（助川・伊藤, 2018 など）など、就学移行期において現場の保育者・教員又は親に何ができるか、という視点での研究が様々な方法でなされ、実践されている。

---

<sup>1</sup> 白百合女子大学准教授

<sup>2</sup> 甲南女子大学教授

<sup>3</sup> 首都大学東京准教授

一方、就学移行の子どもの発達に着目した研究として、就学前の親の自尊感情の高さが就学移行期を通じて、子どものQOL (Quality of Life) を高める要因であることを示唆した研究がある(眞榮城・酒井, 2018)。眞榮城・酒井(2018)の研究では、就学前の親の権威的な養育が同時点のQOLを高め、それが、小学校入学後にも維持されること、また、就学前の子どもの主体性を尊重する親の養育が小学生になってからのQOLの高さを予測する結果を導いている。ここでいう権威的な養育というのは「一貫した統制方略と温かみのある良好な養育態度」を表す。親が子どもの主体性を尊重する養育態度から「小1プロブレム」の予防可能な家庭教育について検討の可能性を開き、就学移行期における子どものQOLの発達についての数少ない縦断的研究の結果を示し、それにかかわる要因について重要な示唆を与えている。

では、就学移行期における子どもの発達を支えるものについて、その他にどのような要因が考えられるであろうか。ここで、生態学的発達理論(Bronfenbrenner, 1979; 1996)からこれまでの研究を俯瞰したときに、検討されていない視点があることに気付く。それは、地域である。そもそも生態学的発達理論は、子どもを中心とした場合、その子どもと直接関係をもつマイクロシステム、その周辺のメゾシステム、それに影響を与えるエクソシステム、さらにそれらを包括するマクロシステムという入れ子のような考え方である(Figure 1参照)。具体的には、子どもは親(家庭)・先生(学校/園)・友達・地域などと直接的に影響を与え合い(マイクロシステム)、親と先生、先生と地域、地域と親、というように子どもと直接的であったものどうしがそれぞれに周辺で影響を与え合っている(メゾシステム)。さらにその周辺に、両親の職場やきょうだいの学校、両親の友人ネットワークや地域の教育委員会の活動なども間接的に子どもに影響を与えている(エクソシステム)。そしてそれらは各市区町村、県、国などによってさまざまな文化や価値観が反映されており、それらが包括的に影響を与えている(マクロシステム)。この視点に立脚した場合、親(家庭)、先生(学校/園)、友人関係などに関する就学移行の研究はみられるが、子どもの就学移行と地域に関する研究は見当たらない。

就学移行に伴い、親に送迎してもらい登園(もしくはバス通園)していた子

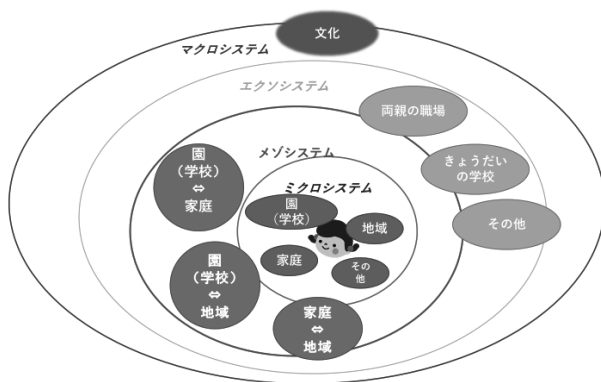


Figure 1 「生態学的発達理論」(Bronfenbrenner, 1979) のイメージ図 (筆者作図)

子どもたちは、突然、子どもだけで（集団をつくりながら）地域に登下校することになる。学校の休み時間に先生が目があるわけではなく、子どもだけで遊び、子どもだけで喧嘩をし、子どもだけで仲直りをすることも増えるだろう。子どもだけで地域で待ち合わせをし、子どもたちだけで地域のどこかで遊び、時間を過ごすようになる。就学をきっかけに、子どもの生活が家庭外に一気に広がっていく就学移行期には、地域の視点は欠かせない。地域に子どもが開かれていく過程を、親はどれくらい安心して見守り送り出すことができるだろうか。

家庭と学校と地域の連携を支える視点から研究を行った酒井・中山・深澤・熊谷・菅原（2016）は、上述したメゾシステムの視点と、アンカーポイントという観点を複合させている。アンカーポイントとは、「入学、卒業、転校のような環境変化を経験する環境移行事態における適応援助策での活用を目的に、『人間とその環境との間の相互交流（すなわち相互作用によって双方が変化していくこと）を促進するような人間-環境システム内の要素』と定義されている（koizumi, 2000・小泉, 2002）。小泉（2002）は、学校がもつ教育的機能に注目し、崩壊しつつあるといわれる地域社会のなかで、学校が、子ども・親・地域住民の一人ひとりをつなげるアンカーポイント的役割になりうるのではないかと論じている。この論から、酒井ら（2016）は、「小学校教員が子どもに

他者とかかわる機会を提供するためにその役割を担うことをアンカーポイント活動と定義し、小学校教員に対してアンカーポイント活動への積極性や、親や地域に抱く信頼感などについて質問紙調査を実施している。その結果、子どもが仲間と関われる機会の提供や遊び方を教える内容を含む「子どもの仲間づくり活動因子」、地域住民が子どもに人的資源を提供し、子どもが地域活動に参加することで異年齢の他者と交流する内容の「子どもと地域をつなげる活動因子」、子どもの暮らしや安全にかかわる活動内容の「子どもの暮らし・安全を支える活動因子」の3つの因子が抽出された。さらに興味深い点は、教員の勤務地が出身地の場合に、地域に抱く信頼感の高さがあれば活動への積極性を助長し、信頼感が低い場合には積極性が最も低くなっていたことである。教員の勤務地が出身地であるか否かの問題ではなく、出身地であり、かつ、信頼感があるかどうかをアンカーポイント活動への影響を与えるという示唆は重要である。これを親に置き換えて考えたときに、親にとって子育てをしている地域が出身地であるかどうか、もしくは、自分が子育てしている地域に信頼感があるかどうか、という点に着目する価値があるのではないだろうか。そもそも、就学前の施設でも、また、小学校でも、地域と家庭とつなぐアンカーポイント活動は何かしら存在し、それを、親はどれだけ積極的に活用しようとしているのだろうか。その姿勢は、親の養育態度にどのように影響し、そして、就学移行期の子どもの発達や社会性の育ちにどのように影響を与えるのだろうか。先の眞榮城・酒井（2018）の研究結果において、子どものQOLの発達に親の養育態度が影響していたが、その養育態度に影響を与える要因、なかでも地域の要因をもさらに探索していくことも必要ではないだろうか。このような視点から子どもの就学移行について明らかにしていくことは新しい視点を投げかけるものになると考える。

本研究では、まず、①親が子育てしている地域に対してどのように信頼感を抱いているか、また、就学前と就学後にアンカーポイントがどれだけ存在しているか、さらに、それらアンカーポイントにどの程度積極的に親が関与しているかについて明らかにする。②次に、地域とのつながりが、どのような親の養育態度に影響を与え、さらにそれがどのように就学前後の子どもQOLの発達

へ影響を与えるかについて検討する。②については、以下のような仮説を立てる。

仮説 1. 親の地域への積極的関与が、親の養育態度にポジティブな影響を与える。

仮説 2. 親の権威的養育態度が就学移行期における子どもの QOL にポジティブな影響を与える。

## 2. 研究の方法

### 対象者と手続き

調査対象者は「子ども期の社会性の発達に関する縦断研究プロジェクト（酒井・眞築城・前川・則定・上長・梅崎・田仲・高橋，2012）」に登録している家庭（関東甲信越・関西・九州地域在住）のうち、対象児が6歳（年長）、小学1年生の各時点で実施した調査に参加した192人の子どもたちの母親（平均年齢は38.53歳， $SD=4.53$ ）であり、対象児の性別は、男子100名、女子92名であった。本調査の対象児への調査は、子どもが該当する学年になった際に、各年度の2月から3月にかけて一斉に実施された。

### 質問項目

#### （1）子育てをしている地域への信頼感

「ソーシャルキャピタル」Bonding and Bridging Scale の邦訳版（酒井・中山・深澤・熊谷・菅原，2016）を参照し、「ソーシャルキャピタル」を構成する3つの下位領域13項目について、「5. よくあてはまる」「4. ややあてはまる」「3. どちらともいえない」「2. ややあてはまらない」「1. まったくあてはまらない」の5件法で回答を求めた。具体的な因子と項目は下記の通りであった。

##### 1) 「Bonding」(結束) 領域

地域コミュニティ内での他者への信頼や情緒的な関係性を表す「この地域には、私が困ったときに助けてくれると信じられる人が何人かいる」「この地域にはさみしいときに話し相手になってくれる人が何人かいる」など4項目

## 2) 「Bridging」(橋渡し) 領域

地域コミュニティ内の他者同士のつながりやすさを表す「この地域の人と関わっていると、自分が社会の一員であると感じる」「地域にいるみんながつながっていると感じる」など4項目

## 3) 「地域考慮」(地域へのかかわり意識) 領域

自分が暮らす地域へのかかわり意識を評価するものとして「自分が暮らす地域全体のことについて考えることがある」「自分の暮らす地域が将来どのようになっているのか気になる」など5項目。これらは、齋藤(1999)の社会考慮尺度の項目を「社会」を「地域」と書き換え使用した。

## (2) アンカーポイント

「教員のアンカーポイント活動の積極性尺度」(酒井・中山・深沢・熊谷・菅原(2016))を参照し、学校の取り組みと親の参加の2領域10項目について「4.よくある」「3.たまにある」「2.あまりない」「1.全くない」の4件法で回答を求めた。具体的な因子と項目は下記の通りであった。

### 1) 「園/学校の取り組み」についての項目群

「放課後や休日に幼児が異年齢の子どもと交流する機会をつくる」「園児/生徒や親が自治体の行事(ラジオ体操など)や地域のお祭り、伝統行事に参加するように促す」など園/学校の取り組み6項目

### 2) 「親の参加」についての項目群

「親が園/学校に来て、園/学校の様々な活動のボランティアを行うことがある」「親が園/学校と一緒に、地域の環境美化運動や安全を守る活動(登下園の見守り隊や子ども110番など)を行うことがある」など4項目

## (3) アンカーポイントへの親の積極性

上記(2)の「園/学校の取り組み」と「親の参加」、合計10項目すべてについて、それぞれさらに、親自身に「あなた自身は…4.よく参加する、3.たまに参加する、あまり参加しない、1.全く参加しない」の4件法で回答を求めた。

#### (4) 親の養育態度

RAISIN CHILDREN CHECKLIST (Shumou, Vandel, & Posner, 1998) を邦訳した尺度 (菊池・松本・酒井・菅原, 2015) を参照し、「あなたが決めた決まりごと (ルール) について、なぜそのようにしなければならないかという理由を〇〇ちゃんに説明しますか」「叱る前に、なぜそういうことをしたのかを自分で説明するチャンスを〇〇ちゃんにあげていますか」などの「権威的養育態度」(一貫した統制方略と温かみのある良好な養育態度) 4項目について「4. 全くその通りだ」「3. ほぼその通りだ」「2. かなり違う」「1. 全く違う」の4件法で回答を求めた。

#### (5) 子育ての肯定感

親の子育て肯定感について問う項目を作成し、「子育てをすることで充実感を感じる」「子育てをうまくしてきていると感じる」、など「子育て肯定感」について3項目、「子育てででくたくたになったと感じる」「一日の子育てが終わると疲れ果てたと感じる」など子育てストレス関連の「子育て否定感」について3項目、それぞれ「5. 非常にあてはまる」「4. かなりあてはまる」「3. まあまああてはまる」「2. あまりあてはまらない」「1. まったくあてはまらない」の5件法で回答を求めた。

#### (6) 子どものQOL総得点

Kiddy-KINDL<sup>R</sup> Parent's version (Ravenssieberer & Bullinger, 1998) の日本語版 (根本・柴田・松崎・古荘, 2013) を使用した。本研究では眞榮城・酒井 (2018) にならい、オリジナル 46項目のうち、身体的健康・精神的健康・自尊感情・家族・友だち・学校 (園) 生活の6領域 24項目を使用し、「5. いつも、4. たいてい、3. ときどき、2. ほとんどない、1. ぜんぜんない」の5件法で回答を求めた。6領域の合計を「QOL総得点」とした。

#### 4. 結果 以下、SPSS 27 for Windows を使用し分析を行った。

##### (1) 現在の子育て地域への信頼

###### 1) 地域への信頼～ソーシャルキャピタル

「この地域には、私が困ったときに助けてくれると信じられる人が何人かいる」「この地域にはさみしいときに話相手になってくれる人が何人かいる」などの「Bonding（結束）」領域、「この地域の人と関わっていると地域に居るみんながつながっていると感じる」「この地域の人と関わっていると、新しい話し相手が増えていく」など「Bridging（橋渡し）」領域、「自分の行動がいかに地域に影響を与えているのかを考えることがある」「自分が暮らす地域全体のことについて考えることがある」などの「地域考慮」領域のそれぞれの総得点の平均（標準偏差）と男女差について Table1 に示す。男女による有意差は就学前の「地域考慮」のみであった ( $F(1,146) = 5.28, p < .05$ )。また、3つの各領域の就学前後を比較したところ、「Bonding」( $t(142) = 1.08, ns$ )、「Bridging」( $t(143) = 0.30, ns$ )、「橋渡し」( $t(143) = 0.16, ns$ ) といずれも就学前と就学後において有意な差はみられなかった。(Figure 2 参照)

##### (2) アンカーポイント

子どもの通っている学校・園において、どの程度アンカーポイントが存在す

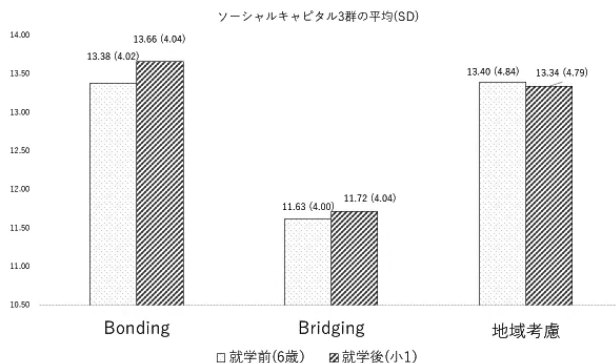


Figure 2 地域への信頼感に関する就学前後の比較 (対応のある  $t$  検定)



るかについて、「学校（園）の取り組み」領域と「親の参加」領域についての平均値を  $t$  検定にて比較した結果を Fig.3 に示す。また、下位 10 項目すべての就学前（6 歳時点）と就学後（小 1）の項目の回答の平均に対してそれぞれ対応のある  $t$  検定を行ったところ、6 つの項目で有意差があったものを Fig.3 に示す。続いて、有意差が確認された 6 項目について、就学前後の同時点においての、アンカーポイントの有無（以下、AP 有無）とアンカーポイントに対する積極性（以下、AP 積極性）の平均の比較を  $t$  検定にて行ったところ、「園児や保護者が自治体の行事（ラジオ体操など）や地域のお祭り、伝統行事に参加するように促す」（就学後 AP 有無 > AP 積極性,  $t(191) = 3.45$ ,  $p = .001$ ）、「園児の家族同士が自由に参加して関わり合うような企画（園参観や運動会、バザーなど）を実施する」（就学前 AP 有無 < AP 積極性,  $t(175) = 5.63$ ,  $p < .001$ ）、「地域で行われるイベント（地域文化の継承行事や年中行事など）を宣伝したり、手伝ったりする」（就学前 AP 有無 < AP 積極性,  $t(177) = 2.27$ ,  $p < .05$ 、就学後 AP 有無 > AP 積極性  $t(191) = 5.80$ ,  $p < .001$ ）「保護者が園に来て、園の様々な活動のボランティアを行うことがある」（就学前 AP 有無 < AP 積極性,  $t(177) = 3.15$ ,  $p < .01$ 、就学後 AP 有無 > AP 積極性  $t(193) = 6.70$ ,  $p < .001$ ）「保護者が園と一緒に、放課後や休日などに園児や他の子どもも集めて、子ども同士で遊ばせる活動をする」とある」（就学後 AP 有無 > AP 積極性  $t(187) = 5.08$ ,  $p < .001$ ）「保

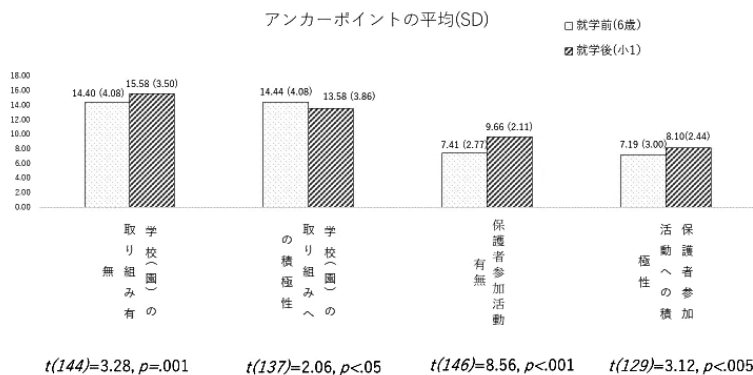


Figure 3 アンカーポイント得点に関する就学前後比較（対応のある  $t$  検定）

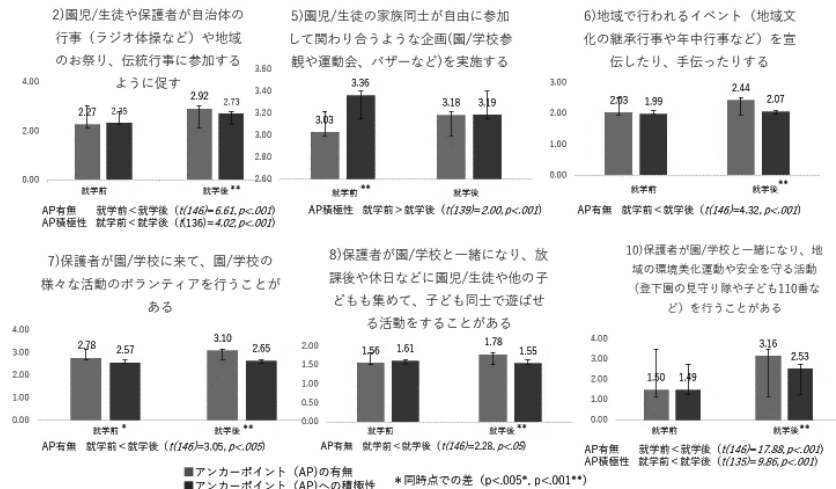


Figure 4 就学前後に有意差のあるアンカーポイント6項目 (対応のある  $t$  検定)

「保護者が園と一緒に、地域の環境美化運動や安全を守る活動 (登下園の見守り隊や子ども 110 番など) を行うことがある」(就学後 AP 有無 > AP 積極性  $t(192) = 9.17, p < .001$ )、において有意な差があった (Fig.4 参照)。

### (3) 仮説検証

就学移行における、就学前後の子どもの QOL の変化とそれに関わる親の養育態度や地域関与の検討のため、共分散構造分析 (SPSS, Amos ver.27) によるパス解析を実施した。解析に先立ち、Table 1 に示した変数間の関連を見たところ、就学前と後の子どもの QOL は有意な関連が示された ( $r = .595, p < .01$ )。また、就学前の QOL と、親の子育て否定感情 ( $r = -.195, p < .05$ )、子育て肯定感情 ( $r = .205, p < .05$ )、就学前の Bonding ( $r = .201, p < .05$ )、就学後の Bonding ( $r = .321, p < .01$ )、就学前のソーシャルキャピタル ( $r = .182, p < .05$ )、就学後のソーシャルキャピタル ( $r = .201, p < .05$ )、権威的養育態度 ( $r = .287, p < .01$ )、と有意な関連が示された。また、就学後の QOL も、就学前の子育て肯定感 ( $r = .395, p < .01$ )、親の子育て否定感情 ( $r = -.207, p < .05$ )、就学前の Bridging ( $r = .245, p < .01$ )、就学後の Bonding ( $r = .249, p < .01$ )、就学前のソーシャルキャピタル

Table 1 ソーシャルキャピタル3領域の1要因分散分析結果

		M (SD)			F	p
		男児	女児			
就学前	Bonding	13.61	3.92	13.17	4.10	5.28 p<.05
	Briging	11.47	3.94	11.69	4.07	
	地域考慮	12.66	4.54	14.41	4.75	
就学後	Bonding	13.39	4.23	14.02	4.07	
	Briging	11.58	4.20	11.55	3.97	
	地域考慮	13.01	4.90	13.80	4.81	

Table 2 子どものQOLと親の養育態度ならびにソーシャルキャピタルの相関

	QOL総得点6歳	QOL総得点小1	子育て肯定感6歳	子育て肯定感6歳	Bonding6歳	Bridging6歳	地域考慮6歳	Bonding小1	Bridging小1	地域考慮小1	ソーシャルキャピタル6歳	ソーシャルキャピタル小1	権威的養育態度
QOL総得点6歳	1.00												
	195.00												
QOL総得点小1	.596**	1.00											
	107.00	167.00											
子育て肯定感6歳	-.195*	-.207*	1.00										
	126.00	123.00	191.00										
子育て肯定感6歳	-.205*	-.395**	-.187**	1.00									
	126.00	123.00	191.00	191.00									
Bonding6歳	-.201*	-.15	-.07	.280**	1.00								
	124.00	120.00	188.00	188.00	188.00								
Bridging6歳	.12	.245**	-.09	.268**	.600**	1.00							
	125.00	122.00	190.00	190.00	188.00	190.00							
地域考慮6歳	.14	.210*	-.05	.285**	.416**	.565**	1.00						
	125.00	122.00	190.00	190.00	188.00	190.00	190.00						
Bonding小1	.321**	.249**	-.04	.16	.706**	.421**	.225**	1.00					
	105.00	138.00	146.00	146.00	143.00	145.00	145.00	180.00					
Bridging小1	.08	.12	.01	.220**	.502**	.595**	.426**	.588**	1.00				
	104.00	138.00	145.00	145.00	142.00	144.00	144.00	180.00					
地域考慮小1	-.12	.11	-.01	.347**	.314**	.455**	.602**	.360**	.715**	1.00			
	104.00	138.00	145.00	145.00	142.00	144.00	144.00	179.00	179.00	180.00			
ソーシャルキャピタル6歳	.182*	.237**	-.04	.328**	.801**	.857**	.819**	.531**	.609**	.565**	1.00		
	124.00	120.00	188.00	188.00	188.00	188.00	188.00	143.00	142.00	142.00	188.00		
ソーシャルキャピタル小1	.201*	.186*	-.02	.298**	.609**	.593**	.520**	.757**	.909**	.848**	.693**	1.00	
	103.00	136.00	144.00	144.00	141.00	143.00	143.00	178.00	178.00	178.00	141.00	178.00	
権威的養育態度	.287**	.363**	-.186*	.439**	.167*	.11	.07	.175*	.07	.220**	.13	.197*	1.00
	128.00	123.00	190.00	190.00	187.00	189.00	189.00	147.00	146.00	146.00	187.00	145.00	193.00

( $r=.237, p<.05$ )、就学後のソーシャルキャピタル ( $r=.186, p<.05$ ) 権威的養育態度 ( $r=.363, p<.01$ ) と有意な相関がみられた。他にも有意な相関がみられ、すべての変数間の相関は Table 2 に示す。

次に、就学前後を軸として、地域とのかかわりと親の養育態度・子どものQOLに関する縦断的検討を共分散構造分析 (SPSS. Amos ver.27) にて試みた。なお、子どもの気質 (エフォートフル・コントロール) や子どもの性別については統制した。パス解析の結果、モデルの適合度指標を確認したところ、

$X^2(27) = 41.851, p = .057, CFI = .942, REMSEA = .066$  と、モデルのデータへのあてはまりは十分であった。就学前の QOL 総得点から、就学後の QOL 総得点へのパス ( $\beta = .53, p < .01$ ) は正に有意であり、また、就学前の権威的養育態度からの就学後の QOL 総得点へのパス ( $\beta = .22, p < .01$ ) ならびに就学後の権威的養育態度へのパス ( $\beta = .50, p < .01$ ) も正に有意であった。また、就学前の母親の地域関与度から就学後の母親の地域関与度へのパス ( $\beta = .47, p < .01$ ) も正に有意であった。就学前の母親の地域関与度はから就学後の権威的養育態度へのパス ( $\beta = .14, p < .10$ ) も正に有意であった。(Figure 5 参照)

親の地域への積極的関与が、親の養育態度にポジティブな影響を与えるという「仮説 1」については、親の地域への積極的関与が就学前の親の権威的養育態度に影響を与える可能性と、就学後の権威的養育態度に影響を与えるという結果となった。親の権威的養育態度が就学移行期における子どもの QOL にポジティブな影響を与えるという「仮説 2」については、就学前の親の権威的養育態度が就学前の子供の QOL に影響を与える可能性があり、就学後の子どもの QOL にポジティブな影響を与えるという結果となった。

### 結果と考察

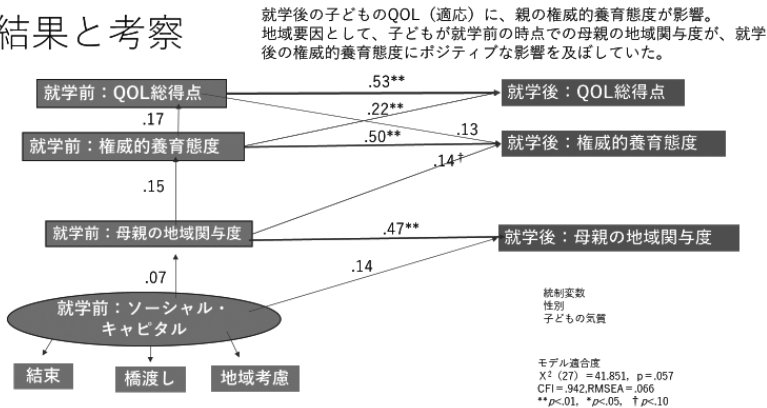


Figure 5 地域とのかかわりと親の養育態度・子どもの QOL に関する縦断的検討

## 5. 考察

本研究では、親が子育てしている地域に対してどのように信頼感を抱いているか、また、就学前と就学後にアンカーポイントがどれだけ存在しているか、さらに、それらアンカーポイントにどの程度積極的に親が関与しているかについて明らかにすることを目的とした。以下に主な結果に分けて考察する。

### (1) 地域への信頼や親の地域への積極性

地域への信頼感3因子「Bonding」、「Bridging」、「地域考慮」については、すべて就学前後での有意な得点変化は見られなかったことから、地域への信頼感が就学前後の1年間で変化するわけではない様子が伺えた。一方、アンカーポイントの存在は、就学前よりも就学後のほうが有意に増えており、小学校の地域と家庭をつなごうとするアンカーポイント機能への積極性が伺える。ただし、そもそもこれらアンカーポイントの質問項目は小学校教育を対象に考案された項目であるため(酒井ら, 2016)、就学前施設(幼稚園や保育園)にアンカーポイント活動が少ないとは言い難く、今後、就学前施設のアンカーポイント活動についてあらためて研究していく必要があろう。とはいえ、就学前後の、保護者のアンカーポイントへの積極性に着目してみると興味深い結果となった。学校(園)の取り組み活動は就学後に有意に増加しているが( $t(144) = 3.28, p = .001$ )、学校(園)の取り組み活動への積極性に関しては、有意に減少している( $t(137) = 2.06, p < .05$ )。なかでも、「園児/生徒の家同士が自由に参加してかわりあうような企画(園/学校参観や運動会、バザーなど)を実施する」という項目では、アンカーポイントへの積極性が就学後に有意に減少していた( $t(139) = 2.00, p < .001$ )。この項目は子どもの「家同士」の関わり合いを含む内容となっており、就学前施設における最長6年間の親同士のつながりあいの影響が想像され、親どうしのつながりがあることが親のアンカーポイントへの積極性につながるのではないかと考えた。また、片岡・藍澤・菅原(2005)の研究でも、小1~小3は学校・家庭・地域の連携に親が消極的であり、小3~小4の移行の際に連携に対する積極性の増加がみられており、本研究の結果もそれに類するのかもしれない。今後、アンカーポイントに対する

親の積極性の発達についても検討していきたい。

## (2) 子どもの QOL の発達変化と親の養育態度を支える地域

就学前の子どもの QOL が就学後の子どもの QOL と相関があり、また有意な正のパスが見られたことは、眞榮城・酒井 (2018) の研究結果を支持する結果となった。眞榮城・酒井 (2018) の研究では、就学前の親の権威的養育態度が同時点での子どもの QOL に有意な正のパスが確認されていたが、本研究では、就学前の親の権威的養育態度は就学後の子どもの QOL に有意な正のパスが確認された。そもそも、権威的養育態度とは、権威的 (authoritative)、権威主義的 (authoritarian)、許容的 (permissive) の 3 つの因子から構成されており、権威的態度は応答性と統制のいずれも高いタイプで、子どもとの温かく、協調的な関わりを持ち、その温かさの下で柔軟に統制を行うような特徴がある。権威主義的態度は、統制は高いが応答性は低いタイプで、子どもを服従させ、子どもの心理や行動を厳しく統制するような特徴がある。許容的態度は、応答性は高いが統制は低いタイプで、子どものどのような行動でも受容するような特徴がある (Baumrind, 1967, 1971; 中道, 2013)。子育ては、ときに、子どもの思い通りに許容するほうが、楽に想うこともある。なぜなら、統制するということは、子どもとのぶつかり合いも生じ、親も子も葛藤を産むからである。権威的養育態度は、応答性も統制もいずれも高いということからも、親の自己コントロールが求められることは想像しやすい。本研究にて「権威的養育態度」と正の相関があったのものは、「Bridging」ではなく「Bonding」であった。地域が橋渡的に機能していることよりも、地域への結束感、地域コミュニティ内での他者への信頼や情緒的な関係性と相関があったということである。「この地域には、私が困ったときに助けてくれると信じられる人が何人かいる」、「この地域にはさみしいときに話し相手になってくれる人が何人かいる」、といういわば親を Hold してくれるような、【安心安全な他者が地域コミュニティに存在する】ということが、親の葛藤を支え、一貫した態度をとることを可能にしているのかもしれない。それが親自身の子育て肯定感を支え、就学移行期の子どもの QOL の発達をも支えるという可能性が示唆された。

今回の研究で、就学前からの親の地域関与度は、就学後の地域関与度にも影響を与え、就学後も権威的養育態度をとることを可能にしているという示唆を得た。子どもの就学移行期のQOLの発達を支えるものとして、親が一貫した態度をとることが可能であることが影響を与え、それを支えてくれるのは、地域への安心感や信頼感であり、地域から発信されるものを活用してみよう・関与してみようとする親自身の積極性であり、親が関与したくなるようなアンカーポイントの存在が不可欠なのではないだろうか。ただし、アンカーポイントに親がアクセスしようとする積極性は、親同士のつながりや安心感が関係している可能性もあり、親のアンカーポイントの積極性を支える要因をさらに研究していく課題が見つかった。また今回は、子どものQOLの発達の变化と地域の関係について検討を行ったが、今後は、子どもの社会性の発達と地域の関係について研究を進めていきたい。

## 引用文献

- Baumrind, D. (1967). Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*, 75, 43-88.
- Baumrind, D. (1971). Current patterns of parental authority. *Developmental Psychology Monograph*, 4, 1-103.
- Bronfenbrenner U. 磯貝芳郎・福富護（訳）1996 人間発達の生態学（エコロジー）— 発達心理学への挑戦 — 川島書店（Bronfenbrenner, U.1979 *The ecology of human development: Experiments by nature and design*. Cambridge, MA: Harvard University Press.）
- 堀江真由美・玉井ふみ（2012）. 就学移行支援に向けて保育所・幼稚園で実施する発達評価の試み：5歳児の発達スクリーニング試案, *人間と科学：広島県立保健福祉大学誌*, 12(1), 69-78.
- 片岡千香子, 藍澤 宏, 菅原麻衣子（2006）. 保護者の意識に見る教育環境づくりのあり方— 学校・家庭・地域の連携による取組みの現状と課題 —, *日本建築学会計画系論文集* (591), 5, 57-64.
- 菊池知美・松本聡子・酒井 厚・菅原ますみ（2015）. 母親による保育施設との相談：就学後の子どもの問題行動との関連プロセス, *チャイルド・サイエンス*, 11, 66-70.
- 小泉令三（2002）. 学校・家庭・地域社会連携のための教育心理学的アプローチ：アンカーポイントとしての学校の位置づけ, *教育心理学研究*, 237-245.
- 眞築城和美, 酒井 厚（2018）. 就学移行期における子どものQOLの発達と関連要因の検討：親の自尊感情・養育態度との関連を中心として（特集 子ども期の Quality of

- Life (QOL) チャイルド・サイエンス, 16, 19-24.
- 宮本明日香・白川園子・濱中 円・前川美波子・北垣千恵・清水 歩・山田和孝 (2020). 就学移行期の発達障害児の親のレジリエンス獲得を促すプログラムの開発と評価, LD 研究, 29(1), 71-84.
- 中道主人 (2013). 父親・母親の養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響, 静岡大学教育学部研究報告, 人文・社会・自然科学篇, (63), 109-121.
- 根本芳子・柴田玲子・松寄くみ子・古荘純一 (2013). 日本における Kiddy-KINDL Questionnaire 「幼児版 QOL 尺度親用」の検討, 子どもの健康科学, 13(2), 17-26.
- Reizo Koizumi (2000). Anchor Points in Transitions to a New School Environment, Journal of Primary Prevention volume 20, 175-187.
- 斎藤和志 (1999). 社会的迷惑行為と社会を考慮すること, 愛知淑徳大学論集, 文学部篇, 24, 67-77.
- 酒井 厚・眞榮城和美・前川浩子・則定百合子・上長 然・梅崎高行・田仲由佳・高橋英児 (2012). 子ども期の社会性の発達に関する縦断研究プロジェクト(1): 養育者の子育てサポートネットワークと養育態度および幼児の問題行動との関連, 教育心理学学会第 54 回総会発表論文集, 402.
- 酒井 厚・中山紫帆・深澤祐介・熊谷好恵・菅原 ますみ (2016). 家庭-学校-地域の連携を支える教員の活動: 学校のアンカーポイント役割遂行の観点から, 教育心理学研究, 64(4), 505-517.
- 佐藤智恵 (2013). 担任する子どもの就学移行期を保育者はどう捉えているか: 保育者の語りの分析より, 福祉臨床学科紀要, (10), 49-54.
- 柴田玲子・根本芳子・松寄くみ子・田中大介・川口 毅・神田 晃・古荘純一・奥山真紀子・飯倉洋治 (2013). 日本における Kid-KINDLR Questionnaire (小学生版 QOL 尺度) の検討 日本小児科学会雑誌, 107(11), 1514-1520.
- 助川文子・伊藤祐子 (2018). 発達障害のある児童の就学移行期における学校適応に関する要因: 母親に対する調査より, 作業療法, 37(6), 616-626.
- Shumow, L., Vandell, D. L., & Posner, J. K. (1998). Harsh, firm, and permissive parenting in low-income families. Journal of Family Issues, 19, 438-507.
- 山中久美子 (2010) 小学校生活を円滑にスタートさせるための幼稚園における取り組み—有効な連携で「具体的支援」を小学校につなぐ, 特別支援教育コーディネーター研究, (6), 51~63.
- 若林紀乃・上田敏丈・越中康治・岡花祈一郎・中西さやか・濱田祥子・廣瀬真喜子・松井剛太・八島美菜子・山崎 晃 (2018). 就学移行期における障害のある子どもへの配慮の引き継ぎ: なぜ就学前の日常的な配慮が小学校で活用されにくいのか, 乳幼児教育学研究, (27), 35-43.
- Williams, D. (2006). On and Off the 'Net: Scales for Social Capital in an Online Era, Journal of Computer-Mediated Communication, 11, 593-628.



付記

- \* 本研究は首都大学東京の倫理委員会の承認を得て実施された。
- \* 本研究はJSPS（科研費 19H01757）の助成を受けた。
- \* 本研究はPEERS（Project of Environmental Effect of Relationship and Self／子どもの対人関係と自己の発達に関する縦断研究プロジェクト）の研究成果の一部である。
- \* 本稿は日本発達心理学会第32回大会ラウンドテーブルにおいて報告した内容と議論をもとに、考察を深め加筆し再構成したものである。

西南学院大学人間科学部児童教育学科